The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	旅人としての想像力 : ワーズワスの人間像をめぐって
Author(s)	斉藤, 隆文
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 189-198
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

旅人としての想像力

——ワーズワスの人間像をめぐって

斉　藤　隆　文

ワーズワスは自然詩人であった。その思想や感動は湖水地方を中心とした自然を背景として生まれ，そこで深められていった。もちろんワーズワスに人間が登場しないのではない。ワーズワスは人間と自然と社会についての考察を詩の形で残すことを生涯の課題としていた。ただそれは，あくまでもその三者の分かち難い関係についてのものであり，人間関係そのものを取り上げることはまれであったと言えるだろう。この小論ではそういうワーズワス特有の人間に対する見解をふまえながらその特徴を考えてみたいと思う。

ワーズワスの詩に登場する人物はそのモデルを詩人の身近に特定できない人物が多い。これは一つには明確に特定された人物を歌った場合，その伝記的事実に引きずられてその人物を芸術的に昇華し普遍的なものにすることが難しいことがあったであろう。それと同時に忘れてはならないことはワーズワスの詩に登場する人物は旅先で出会った人々が多いことである。たとえば“The Solitary Reaper”や“To a Highland Girl”などの名品における人物は，いずれもスコットランドへの小旅行の時に出会った人物をモデルとしている。これらに共通する特徴はそこに登場する人物の生活や生涯については，外見上得られる事実を除いてほとんど明らかにされてはいないことである。一方ワーズワスの出会う人々の中には“Ruth”，“Lucy Gray”，“Michael” などの詩におけるように，その人物の生活や生涯が語られている人々がいる。ルースはある流浪人から，ルーシーグレイは妹からその生涯の物語を聞いたことになっているし，又“Michael”では，ワーズワスが実際に会った人物ではなく旅先で出会う石の堆積にまつわる物語に登場する人物ではあるが，やはりその生活と生い立ち

が伝え聞く話として記されている。このようにワーズワスの出会いの詩には二種類の人物像が描かれていると言えよう。一言でいえば一つは生い立ちを明かさない人物群，もう一つはその人生や人間関係が何らかの形で語られる人物群である。そこで以下ではワーズワスの出会う二つの人物群の特徴を，1799～1800 年にかけて作られた“Lucy Gray”，“Ruth”，“Michael”，及び 1802～1803 年にかけて作られた“Resolution and Independence”，“To a Highland Girl”，“The Solitary Reaper”の詩を中心に検討することによって考えたいと思う。

“Lucy Gray”は次のような出会いから始まっている。

> OFT I had heard of Lucy Gray:
> And, when I crossed the wild,
> I chanced to see at break of day
> The solitary child.
>
> (ll. 1-4)

このルーシーがある日父に頼まれて母を町まで迎えに行く途中，折りからの嵐のために道に迷い帰らなくなってしまう。両親は夜通しさがし朝方に雪の中に足跡を見つけてあとを追ったが，その足跡は橋の真中で消えていたのである。この詩についてワーズワスは次のように言っている。

> The way in which the incident was treated and the spiritualizing of the character might furnish hints for contrasting the imaginative influences which I have endeavoured to throw over common life with Crabbe's matter of fact style of treating subjects of the same kind.(1)

ここで“the imaginative influences which I have endeavoured to throw over common life”という言葉が *Lyrical Ballads* における序文の中の言葉“to throw over them〔incidents and situations from common life〕a certain colouring of imagination”と酷似していることからも分かるように，ワーズワスの想像力は内なる光を客体に投射するというイメージで語られることが多いと言えよう。ここで注意すべきは，ルーシーの事故はいわばいたましい夭折の

はずであるが，ワーズワスがその想像力の働きには触れても，この事故そのものについては一般論として淡々と語っているということである。又詩の中にもこの子供の死を嘆く言葉は使われてはいない。このことはワーズワスが現世における人間の悲劇的な運命をいかに現実的な眼でとらえていたかをよく示すものであろう。それ故にこの詩はルーシーという一人の子供の死をかりて，本来人間の生に内在する死を静かに見つめたものであり，Durrant のいうように，物理的宇宙の究極的な破壊力に対する美の悲劇的もろさを歌ったもの[(2)]と言えるであろう。

さて，“Ruth”もやはり人間が「悲哀の世界にいる」(1.83) ことを歌った詩である。母親と幼くして死別した彼女は孤独に成長する。そしてジョージアから来た若者と結婚するが，若者は彼らの住んだ熱帯地方の自由な生活におぼれ，終にルースをすててしまう。狂乱したルースは獄屋に3年いたのち野原をさまようという物語である。ここには“Lucy Gray”の場合と同様に人間の運命の痛ましさが描かれている。ただ“Lucy Gray”の場合とは違って，ここで不幸をもたらすのは南国の「不規則な」(1.128) 自然である。それが若者の心に不規則な衝動を与えたために彼の生活は乱れてしまうのである。ワーズワスは“Ode to Duty”の中で不規則な自由と気まぐれな欲望を非難し義務の尊さをたたえており[(3)]，又虹を歌った詩では“I could wish my days to be／Bound each to each by natural piety” と言い，自然のめぐりに合わせた生活の大切さを述べている。その意味で“Ruth”においては，同時に芽を出し，しぼみ又しぼんでゆく花々 (1.58) で代表される熱帯の不規則な自然と，英国の規則的な自然との対比を背景にした人間の悲劇が扱われていると言えるであろう。

ところでワーズワスはこの詩の最終連で次のように歌っている。

> Farewell! and when thy days are told,
> Ill-fated Ruth, in hallowed mould
> Thy corpse shall buried be.
> (ll. 253-255)

ここで注意をひくのはワーズワスがルースに対して「さらば」と呼びかけて

いることであろう。もちろん直接ルースに対して発せられたものではなく心の中の叫びであろうが，この言葉はワーズワスの詩の世界を理解する上で一つのヒントを与えてくれるのではないだろうか。すなわちこの言葉は旅人に内在する言葉だということである。旅人であるが故に彼が耳にし又目にする悲劇は，生々しい現実の上に一種の審美性をまとってあらわれてくるのである。そしてその悲劇に直接かかわっていないし，又かかわれない為に，それはいつまでも一つの完結したイメージのまま旅人の心に，丁度“spots of time”がそうであるように，ある種の啓示性を持って残り続けるのである。今まで見てきた二つの作品はその意味でいわばワーズワスの心の中に閉じられた世界を形作っている。“Lucy Gray”が荒野での出会いで始まり，やはり荒野でのルーシーの姿で終っていること，又“Ruth”も麦笛を吹く幼い頃の描写で始まり，最後に幼児に戻ったようなルースが横笛を吹く場面が描かれていることなどは，二つの出会いがワーズワスの中で閉じられた世界として構築されていることをよく示していると言えよう。

同様に“Michael”もやはりグリーンヘッド渓谷の描写で始まり，グリーンヘッド渓谷の描写で終っている一つの閉じられた世界である。(4) マイケルは年老いてはいるが気丈な牧羊者であった。彼には妻とルークという幼い息子がいた。二人は仲よく羊を追う生活をするが，ルークが18才になった時一つの事件がもち上がる。マイケルが甥の借金の保証人になっていたために，その肩がわりをさせられるはめになってしまったのである。マイケルは思案したあげく土地を手離すよりもルークを都会に働きに出そうと決める。しかしルークは「ふしだらな都会」(l. 444)で身を持ち崩し海外へ逃亡してしまうのである。この話でも前の二編と同様に人生の悲劇が扱われているが，その悲劇は都会というものの存在が祖先から受け継がれてきた田舎ののどかな生活に及ぼすものである。当時イギリスは産業革命を経験し，多くの農民が都会に流入していた時代であった。この詩においてワーズワスは，田舎の片隅にまでその影響を与えた当時の社会的状況を背景に農民達の暮しを静かに語っている。だがこの作品もまた読者に絶望的な読後感を与えるものではない。ワーズワス自身この作

品の冒頭でこう述べている.

I will relate the same
For the delight of a few natural hearts;
And, with yet fonder feeling, for the sake
Of youthful Poets.
(ll. 35-38)

この作品にもやはり直接その悲劇にかかわらない者にのみ許される心の平静さが感じられるのである。

湖水地方で生まれたワーズワスは幼くして両親をなくし，又長じてからもフランス革命時の悲劇的事件や都会での絶望感などを体験し人生の悲哀を身をもって知っていたはずであり，その経験を踏まえた上で以上の三作品が生まれたと言えよう。しかしながら，ワーズワスはその経験をただリアルに描き出すのではなく，それを旅人の目を通して語るのである。ワーズワスの詩的風景がみせる落ち着いた哀愁はそういった所から生じていると言えよう。

以上みてきたように，ワーズワスの出会う一つの人物群には現実世界の悲劇がその人物にまつわる物語とともに描かれている。しかし旅人が常に人生の悲劇をのみ見聞きするのではない。出会いはある時突如として幸福な形で起こりうる。その時その人物は時間的存在であることを止め，旅人はただ目前に存在する輝きに満ちた姿のみに心を奪われるのである。喜びあふれる作品となっている "The solitary Reaper" や "To a Highland Girl" はそういう出会いであったと言える。

"Solitary Reaper" はこのように始まっている。

BEHOLD her, single in the field,
Yon solitary Highland Lass!
Reaping and singing by herself;
Stop here, or gently pass!
(ll. 1-4)

旅人はやはり「立ちどまるか，さもなくば静かに通り過ぎる」ほかに道はな

い。そして先に取り上げた人物像の場合とは違って，対象に対する知識を持たないことによって旅人の想像力はより活発に活動しはじめるのである。麦刈る乙女の声はアラビアのうぐいすやヘブリデス諸島の郭公の声に比されるとともに，その歌の内容についてさまざまな推測がなされる。そして静かにその姿を眺め，声に耳を傾けた後，そのイメージを心に刻みつけて旅人は去ってゆくのである。

"To a Highland Girl"の乙女も同様に「神の恵み」(l. 62)によって出会った人物である。ここでもワーズワスは「我遠く離れてゆく時」と述べ，別れゆく運命に言及している。そして"The Solitary Reaper"の場合と同様に，ワーズワスの想像力の中でこの高原の乙女は周囲の自然と一つになって，「夢の中で作られたもののように」(l. 12)見えるのである。またこの詩においては"The Solitary Reaper"におけるよりももっと明確に記憶がこの乙女の姿を永久にとどめることについて述べている(ll. 66-67)。

このように両詩においてワーズワス特有の想像力，すなわち半ば知覚し半ば創造する想像力がいかんなく発揮されていると言えるだろう。そしてこの両詩における躍動感は，突然の出会いによって高められた感動が，別れゆくまでのわずかの時間に凝縮されたことから来ているように思われる。丁度それはワーズワスが"My heart leaps up when I behold／the rainbow in the sky"と歌い出た虹の詩と同じ情況と言える。なぜなら虹も又突然青空にかかり，それが消えゆくまでの時間が短いが故にそれを見る人に強い感動を与えるのであるから。

以上われわれはワーズワスの出会いの詩に現われる二群の人物像について検討してきた。両者の人物群に共通した特徴は，双方がワーズワスの心の中に完結した世界を作っていることの他に，それらの人物がある特定の場面に一人で現われることである。このことはJohn Johnsも指摘するように，[5] ワーズワスの想像力にとって孤独が決定的な意味を持っていることと深く関っていると言えよう。ところでそういう共通点はあるにしてもこの二群の人物を扱った詩は，明らかに質的に異なった読後感を読む者に与えずにはおかないのである。一体どちらが本来のワーズワスなのであろうか。

それを考える時，“Tintern Abbey”の中における自然と人間についての見解はわれわれに多くの示唆を与えてくれる。ワーズワスはそこでこう歌っている。

For I have learned
To look on nature, not as in the hour
Of thoughtless youth; but hearing oftentimes
The still, sad music of humanity,
Nor harsh nor grating, though of ample power
To chasten and subdue.
(ll. 88-93)

「思慮なき若き頃」というのはワーズワスが自然に導かれるままに，小鹿の如く峰を越えとび廻った時のことである。この詩を書いている時点ではそういう楽しい動物的な活動はすでに去っている。それはフランス革命を目撃し，又都会での「無益な焦そうと浮世の熱病」(ll. 52-53)とを経験した後のことである。こうしてワーズワスは自然を昔とは違った風に見るすべを獲得したと言う。すなわちワーズワスは，「人間性の静かで悲しい音楽」を聞きながら，すなわち人生経験を経ていない子供としてではなくさまざまな人生経験をしてその悲哀を知った上で，自然を眺めるのだということである。そしてこの人生の悲哀は過ぎ去った今はもはや「不ゆかいなあるいは耳ざわりな」音楽としてではなく，聞く人の心を「鎮める」音楽として詩人の耳に響くというのである。これに続いてワーズワスはこう書いている。

And I have felt
A presence that disturbs me with the joy
Of elevated thoughts; a sense sublime
Of something far more deeply interfused,
Whose dwelling is the light of setting suns,
And the round ocean and the living air,
And the blue sky, and in the mind of man.
(ll. 93-99)

ここで歌われているのは，あらゆるものの中に流れあらゆるものを結びつけている霊的な存在を詩人が感得したことである。そしてこのことはワーズワスが自然と人間との連続性，調和した一体感を，子供の頃のような本能的で粗暴なるよろこび（l. 73）ではなく，より高められた思想の喜びをもって認識したことを語っているのである。そして自然そのものについてはワーズワスはこう述べている。

and this prayer I make,
Knowing that Nature never did betray
The heart that loved her; 'tis her privilege,
Through all the years of this our life, to lead
From joy to joy.
（ll. 121-125）

すなわち自然自体は何ら変化していないのである。変ったのは結局ワーズワスが自然だけに目を向けるのではなく人間の悲哀についても「しばしば」（l. 90）考えるようになったこと，そして以前よりも深く自然と人間とを結びつけているものを理解するようになったことである。

このように見てくると，先に扱った二群の人間像はまさにワーズワスが新しく獲得した能力の具体的成果であることが分かってくるのである。“Lucy Gray”や“Ruth”や“Michael”は「人間性の静かな悲しい調べ」を聞くワーズワスという旅人を通して語られる世界であるが故に，赤裸々な悲劇性はかげをひそめ，読む人にしみじみとした哀愁を感じさせるものとなっているのだといえよう。しかしながらワーズワスの詩的想像力の神髄はそこにとどまってはいないのである。なるほど上記の三作において絶望的な悲劇が哀愁に満ちた普遍的な物語に変っているとはいえ，ワーズワスの本来の想像力は人間の悲劇的側面のみを描き出すことには向いてはいなかったように思われる。たとえば“Michael”の中では次のような言葉が語られる。

And hence this Tale, while I was yet a Boy

Careless of books, yet having felt the power
Of Nature, by the gentle agency
Of natural objects, led me on to feel
For passions that were not my own, and think
(At random and imperfectly indeed)
On man, the heart of man, and human life.
(ll. 27-33)

上記の言葉でも分かるようにワーズワスの人生や人間に対する関心は自然に対する関心よりずっと遅れており，また生来のものではなかったといえよう。そして“The Child is father of the Man”の言葉通りこの傾向は詩人となってからも続いているように思われる。それ故に人間を題材とする場合にも，“Tintern Abbey”で歌われたような自然との一体感を示す人間を描く時にワーズワスの本領が最もよく発揮されたと言える。大自然との調和を見せている「麦刈る乙女」や「高原の乙女」との出会いは，その意味でワーズワスの想像力が最も理想的な形で現れた出会いであったと言えるだろう。

以上ワーズワスにおける二種類の人間像を検討してきたが，最後に1802年，すなわちこれら二群の詩の間にかかれた“Resolution and Independence”を見てみたい。これはワーズワスの二種類の出会いの接点を見せてくれる興味深い詩と言える。この詩においてはまず自然の喜びが表現され，詩人も又喜びにひたっているが，一方でいつか来るかも知れない孤独，心痛，苦難，貧困の日々を思い不安にさいなまれている。その時ワーズワスはこの寂しい場所に思いがけず一人の老人に出会うのである。その老人の印像がいかに強烈なものであったかは，この老人についての描写が9連から11連まで続いていることで想像される。そしてワーズワスの「あなたは何をしておいでです。」(l. 88)という問いに対して老人は，「年老いて貧しいので水蛭を取りにこの沼地に来ている」(ll. 99-100)と答えるのである。ここで注意すべきは，この老人はワーズワスが情況から判断しうる以上のことを語ってはいないことであろう。そして丁度“The Solitary Reaper”の歌が何を歌ったものか理解できなかったように，ワーズワスがこの老人から実際聞くのは，その言葉の「気高い趣」(l. 94)

であり，「その声は微かに聞こえる小川のようで，言葉は判然としなかった」(ll. 107-109)のである。それ故にワーズワスはこの老人のおそらく悲劇的な私生活に立ち入らずに済んでいる。そしてこの自然の一部であり又天からの使者であるような老人から生きる希望を与えられるのである。そして“The Solitary Reaper”の歌声を心に刻みつけたのと同様に，ワーズワスはこの詩をこう結んでいる。

> 'God,' said I, 'be my help and stay secure;
> I'll think of the Leech-gatherer on the lonely moor!'
> (ll. 139-140)

もしワーズワスがこの老人の姿に感動を覚え象徴的な意味を与えていなかったら，そしてその老人の身の上話に耳を傾けていたら，おそらくその老人についての“Ruth”や“Michael”のような詩ができ上がっていたことであろう。その意味でこの詩はワーズワスの興味が悲劇的な人間像から自然の中に調和した人間像へと移っていったことを暗示しているように思われる。そしてこの詩を境にして，すでに検討したように，一連の出会いにおける主体(旅人)と客体との合一による至福の瞬間を記した詩群が書かれたのである。

〔注〕

1. E. de Selincourt (ed.), *The Poetical Works of William Wordsworth* (London: Oxford University Press, 1967), I. p. 360.
2. Geoffrey Durrant, *Wordsworth and the Great System* (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), p. 142.
3. "Ode to Duty", ll. 33-38.
4. Anthony Adams, *Wordsworth* (Scotland: Blackie & Son Ltd., 1981), p. 71.
5. John Jones, *The Egotistical Sublime* (London: Chatto and Ltd., 1964), p. 31.